

IAUD Newsletter Vol.4 第16号 (2012年2月号) 目次

1. 特集：余暇のUDPJ 小野栄一氏講演会と国リハ見学会・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

活動報告：余暇のUDPJ

小野栄一氏「国リハの新風」講演会と見学会



余暇のUDPJは、自立支援機器等の研究や開発促進事業を推進しており、国立障害者リハビリテーションセンター（以下、国リハ）障害工学研究部部長である小野栄一氏を講師に「厚労省 国リハの新風～UDの支援技術・機器開発の流れ～」をテーマとした講演会を、同センター（埼玉県所沢市）で1月20日（金）に開催しました。

東京では初雪が観測された寒さの中、他のPJ・WGメンバーも含む約20人が参加。講演の前にはセンター施設内の見学会も実施するなど、充実したイベントになりました。今回のNewsletterは、見学会と講演会の様子を余暇のUDPJメンバーに報告してもらいます。

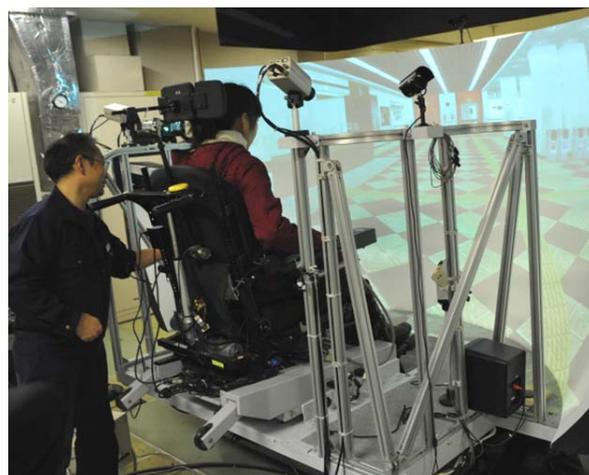
■施設見学

まずは国リハにある研究所と病院、自立支援局の見学をしました。

福祉機器の開発と評価に関する研究を行っている福祉機器開発部では、井上剛伸部長のご説明を受けながら、電動車いすシミュレータ（右写真）を体験しました。

これはテーマパークのアトラクションに使われるようなハイテク技術が盛り込まれ、スクリーンデザインも素晴らしいものです。映し出される空間は視野が広く、臨場感たっぷりの映像で、あたかも本物の病院内や街中の道路に自分がいるかのようです。

電動車いすのシートに座り、ジョイスティックを操作すると、本当に車いすが動いているかのように映像の中をウォークスルー、障害物や坂、段差などの衝撃も体感できます。このシステムは電動車いすの入力装置の評価やこれから電動車いすを使用しようとしている人の自立移動支援に大きく貢献しているそうです。



病院では実際の理学療法や作業療法の部屋を見学しました。歩行や基本動作など、さまざまな訓練機器が置かれた理学療法スペースでは、車いす使用者がひとりで車(模型)の運転席へ移乗訓練するシーンもあり、その動作や苦勞を目の当たりにしました。



病院内にあるトイレ訓練(脊髄損傷)のためのスペース

作業療法室では、トイレやお風呂といった日常生活動作の設備を見せていただき、設備の使い方や訓練方法についての説明を受けました。



自立支援局の住所サイン

また、自立支援局では就労移行支援、つまり就労が見込まれる障害者に、パソコンでの情報処理訓練、工作や工芸、クリーニングなど、就職へ向けた支援を行っています。この支援事務局の建物内には、通路ごとに一丁目、二丁目といった番地サインが大きく掲げられていました。広い施設の中、奥に宿舎のある訓練生で弱視の方が場所を間違えないようにするための手がかりにしたとのこと。国リハでは施設の動線やサインも工夫がされています。

※国立障害者リハビリテーションセンターについては以下のサイトをご参照ください
<http://www.rehab.go.jp/>

■講演会「国リハの新風～UDの支援技術・機器開発の流れ～」



次に、かつて厚生労働省社会・援護局の初代福祉工学専門官として支援機器関連のプロジェクトや事業の立ち上げを中心に活動され、現在は国リハ障害工学研究部部長であり、自立支援機器等の研究・開発促進事業の推進、福祉工学カフェの開催など、多方面で活躍している小野栄一氏の講演会が行われました。

機能だけでは使いのものにならない機器

1999年の日本ロボット学会に関わった小野氏。特別セッション「福祉の現場の声とロボット技術」を担当し、より多くの人に情報を伝えたいと思い予稿資料集を作成したところ、執筆者の多くが、障害だけに焦点を当てず、使用する人たちの気持ちや生活環境、シーンに適合することが重要であると考えていることがわかった。例えば素晴らしい車いすを作ってもらった、それをいざ車で持ち帰ろうとしたら車内に納まらなかった、それでは使えない、まったく意味がないのだ。

※「福祉の現場の声とロボット技術」目次

<http://staff.aist.go.jp/e.ono/session9999.htm>

よいものをいかに普及させていくか、ユーザーの思いを知る

2005年9月、国土交通省や交通ジャーナリスト、バス会社、リハビリテーションセンターなど多くの関係者が集まり、「誰もが使いやすいバスへのシンポジウム」と、ボンネットバスとノンステップバスをUDの視点で乗り比べてみようという試乗会が実現した。

シンポジウムでは、国土交通省の多くの予算が縮小するなか、ノンステップバスの補助事業の予算が増加しているにもかかわらず、ノンステップバスが地方の隅々にまで行き渡っていない現状や海外の事例などが紹介された。

それよりも驚いたのは、試乗会に集まったユーザーたち。その中には、ボンネットバスの木の床を懐かしんで来た高齢者や、車いすの子供を連れて来た親子もいた。その親の真意は、将来、自分の子供がひとりでも動き回れるようにと願って連れて来たということだった。さまざまな人の気持ちや、よいものをどのように普及させるのかをきちんと考えなくては行けないと、改めて考えさせられた。

※「誰もが使いやすいバスへのシンポジウム」

<http://www.sice.or.jp/~si-ae/bus.htm>

共有されていない「当たり前」のこと

2007年10月に開催された「福祉工学シンポジウム 2007」では実行委員長を頼まれ、独断で実行委員会には技術屋だけでなく、ユーザー側になる人を多くメンバーとした。また、最初の委員会会合でメインテーマを決める際、「当たり前」という言葉がよく出てきた。その主な理由は、技術屋が「当たり前」と思っていることを実はユーザー側が知らなかったり、ユーザー側が「当たり前」と思っていることを技術屋が知らなかったり、「当たり前」と思っていたことが立場や職種や障害度合いが異なると、当たり前が当たり前ではなくなったりする、ということがわかった。

そこで、「お互いの当たり前のことを知る」をメインテーマとして、啓発・啓蒙的な企画、問題点を発表し、解決案は参加者と一緒に考えるような企画、提案型の体験・展示などを、多くのユーザー側・賛同者の協力のもと開催した。

※「福祉工学シンポジウム 2007」

<http://www.assistive2007.org/>

もの作りで重要なことは「人を知ること」

国リハでは、自立支援機器やお風呂、トイレのリフォームなどの体験・評価が可能で、ユーザーと開発側が情報交流できる場である「障害者ライフモデルルーム（仮称）」を企画している（2012年3月末に完成予定）。

また、2011年12月には障害者ファッションショーである「国リハコレクション」を開催した。この目的は、誰もがおしゃれで着やすい服を安価で手に入れられる「衣服環境」を作ること。まずは作り手、ユーザー、流通をつなぐ架け橋になり、将来はどの地域にいても同じサービスを手に入れるようにすることです。課題を解決していくことは簡単ではありません、望んでいる人がいて、提供されていない現在の状況に風穴を開けることが重要です。

服を作ることは「人を知ること」。「体」「生活」「気持ち」の3つを知ることである。衣服だけでなく、どんな機器の開発でも、そこがすべての原点だといえるでしょう。

「国リハコレクション 2011」のイベントポスター（右写真）作成では、余暇のUDPJの皆で協力しました。

「新しいファッションの世界へ」
～着たい服がどこでも手に入るように～

情報し
国立障害者リハビリテーションセンター
障害者生活支援センター
文化事業事務局
〒265-0202 千葉県千葉市美浜区
（障害者、衣生活関連の情報発信）

ユーザー
あなたは、誰いす？
杖？
補聴器？

メーカー
衣服メーカー
素材メーカー
リフォーム業
流通業

「あなただけで」
ファッションでコーディネートは行きたい！
フォーマルでも欲しいよね。
えっ？体に合わずと注文額？
既製品で手に入ると助かるね。
日本中、どこでも買えるといいよね。
脱ぎ着が楽だとうれしいな。
やっぱりひとりで着たいよね！

あなたの気持ちを叶えたい

現在の一冊をファッションショーでご紹介します ぜひ、会場に足を運んでください！！

日時：2011年12月22日（木）
1日目：開場 10:00～ ショー開演 11:00～12:00
2日目：開場 13:00～ ショー開演 14:00～15:00
場所：国立障害者リハビリテーションセンター（埼玉県利根町基木4-11）講堂
<http://www.nshb.go.jp/event/fashion/top.html>

参加費：どなたでもご自由に参加できます
参加費：無料
※準備の都合上、ご来場希望の方はお名前、来場希望時間、人数、問い合わせ先までご連絡いただけます。

問い合わせ TEL: 04-2995-3100 (TEL) / FAX: 04-2995-3122 e-mail: richi@nshb.go.jp 福祉工学研究部（研究）

※JUKI マガジン「国リハコレクション 2011」

<http://www.juki.co.jp/jm/jmn/index.html>

メンタルコミットロボット 「パロ」



最後に、産業技術総合研究所が1993年から開発しているメンタルコミットロボット「パロ」（左写真）の実演が行われました。

メンタルコミットロボットとは、かわいいや心地良いなど人からの主観的な評価を重視し、人との相互作用によって、人に楽しみや安らぎなどの精神的な働きかけを行うことを目的にした、人と共存するロボットです。

パロはアザラシの形をして、柔らかくさわり心地よい毛皮で覆われており、トリマーが1体1体刈っていて顔つきが皆違います。体長は57センチ、体重は3キロと人間の赤ちゃん程度の大きさで、学習能力があり、少々乱暴に扱っても大丈夫です。

さまざまな感覚を有していて、喜んだり、いやがったり、泣き声を出します。自閉症などの発達障害の社会スキル向上や、認知症のある人の中核・周辺症状の緩和・改善等に有効であるとのこと。アメリカにおいては、医療機器の承認も得ています。

参加者にはかわいい、気持ちいい、と大好評でした。値段は30万円台で、日本では約1700体が利用されています。

2002年には「世界でもっともセラピー効果があるロボット」としてギネスブックにも認定されています。また、2007年にはロボット専門サイト「robonable」と「gooリサーチ」による「抱きしめたいロボットコンテスト2007」で1位になりました。

デンマークの高齢者向け施設に本格導入されることが決定しており、2011年までに1000体のパロが導入予定で、すでに60%超の地方自治体に導入されています。



※パロ（株式会社知能システム）

<http://paro.jp/>

次号は2月下旬発行予定

特集（予定）：標準化研究WG「やさしい日本語 講演会」開催報告

無断転載禁止

IAUD 情報交流センター（IAUD サロン）：
〒104-0032 東京都中央区八丁堀 2-25-9 トヨタ八丁堀ビル 4 階
電話：03-5541-5846 FAX：03-5541-5847 e-mail：salon@iaud.net